

次に示すのは、柳月美智子『しずかな日々』(講談社文庫)の一節である。小学五年生の「ぼく」は同じクラスの「押野」と一緒に、自転車で三十分以上もかかる所にある工場を探検してみることにした。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「海だ！」

押野が指をさして右手側を示す。見ると、海の濃い水平線が細く見える。久しぶりに海を見た。けっこう近くにあったんだってことに今気が付いた。進んでゆくにしがたって、海はどんどん幅を広げていって、ぼくはなんだかA愕然(がくぜん)としてしまう。海が突然この世に現れたような感じがする。紺色と灰色を混ぜたような空の下にある海は、それよりもっと濃い紺色と灰色だった。

行く先に大きな橋が見える。二級河川のふじみ川だ。学校のそばを通るあやめ川は、このふじみ川の支流となっている。

「えだいち、もうすぐだよ」

押野が振り返って笑う。ぼくもB笑ってうなずく。押野が立ち漕ぎになったのを見て、ぼくも真似をした。そんなことをしてもたいしてスピードは変わらないんだけど、C気がせいそうしてしまった。

ぼくたちは橋を渡った。橋の下は河口になっていて、ウインドサーフィンをやっている人を、めずらしそうに何人かの人が見ていた。

ぼくもはじめて見るヨットみたいなものをDもつと見たいと思ったけど、それよりも今はおもちゃ工場だ。

「橋を越えたところにあるんだ」

押野は自分に言うように、うしろを振り返らずに言ったけど、①ぼくにはその声がよく聞こえた。

長い橋を渡り終えた。押野がスピードを落として、地面に足をつける。

「あそこなんだ」

押野が指差した先には、ぼくがさつき押野から聞いたときに思い②描いた工場があった。本当に押野が言ったとおりだ！

「Eすごい！ ロボットのおもちゃ工場そのものじゃん！」

「なっ！ えだいちもそう思うだろ？ ③俺、ずっと気になってたんだ」

建物は④イガイに小さいけど、建物の外にあるものがぼくらの目をひきつける。建物からは長いらせん状の外階段が出ていて、まるでそれは針金のバネみたいに見える。金属でできている大小の球体は、ここから見ると継ぎ目があるように思える。継ぎ目というより、縫(ぬ)い目みたいだ。地面からは、先のとがった細長いものが何本かによきによきと出ている。全体の色はくすんだブルーグレーでぼくが想像するロボットの色とおなじだ。

ぼくは、ブリキでできた四角い顔のロボットたちが、一生懸命におもちゃを作っているところを想像した。みんな気がやさしいロボットたちだ。

「行ってみよう！」

ぼくらは声をそろえて、お互いにうなずいた。

国道には歩道橋がかかっていて、自転車専用の通り道も⑤モウけてある。ぼくらは自転車を押して歩道橋の坂道をのぼった。

「よく見えるよ」

歩道橋の上から、おもちゃ工場はよく見えた。まるで海の中に建っているみたいだった。今日の空と海の色は、工場の色ととてもよく似ていて、指で四角いフレームを作ってそこを見ると、ひとつの完成された絵みたいだった。

「けっこう遠くにあるんだな」

「うん。向こう側は土地が下がってるんだね」

工場は海のすぐ前に建っているように見えた。ふじみ川と太平洋の交差する角地に建っているように見える。ぼくたちは、ぐんぐんと先に下ろうとする自転車を押さえながら歩道橋の坂道を下りた。

工場は思ったよりもかなり下のほうにあった。ぼくたちは自転車を停めて、そこから歩いていくことにした。舗装されていない道は人の通るところだけ草が生えてなかった。道はまっすぐじゃなくて、ゆるいカーブがいくつかあった。

「ほんとにロボットがいたりして」

ぼくが言うと、押野は、

「ロボットが作るおもちゃ工場っていうのはありえないと思うけど、もしかしたら、ロボットを作る工場っていう可能性はあるよな」と、たのしそうに笑った。

歩いていくと、海の匂いが漂ってきた。

「泳ぎてえな。海パン持ってきてくりやよかった」

押野はそんなことを言うけど、海で泳いだことのないぼくにとつて、潮の匂いは漁港のイメージだ。何度か村田製麺所の仕事仲間に連れられて、朝市に行ったことがあった。スーパーで買う魚よりももちろん新鮮で、値段も安かった。母さんは、まとめ買いした魚を冷凍庫に入れていたっけ。なんだか遠い昔のことのような気がしてしまう。

背の高い草が多くなってきて、工場が④シカイからはずれたけど、ぼくたちは、ただ「※」しながら土ぼこりの立つ小さな道を一列になって歩いた。

「あれっ？」

行く先にフェンスが見える。

「行き止まりなのかな」

ぼくらはかけ足で行った。道はそこで終わっていたけど、フェンスには小さな入り口がついていた。鍵はかかってない。押野がさびついたフェンスを押した。ひい、という軽くて④甲高い音がした。

「あつ」

入ると、そこはもう工場の敷地だった。スニーカーの感覚がさつきとはちがうと思ったら、地面がコンクリート敷きになっている。広い敷地を見渡す。人の④気配はなかった。

「あれ、そうじゃない？」

五十メートルくらい向こうに、さつきふじみ橋を渡ったときに見えた建物があつた。見る方向がちがうせい、想像していたのとちがつていた。ぼくらは、らせん階段や球体のある場所を探そうと、③つま先立ちになつてきよろきよろとあたりを見回しながら歩いた。

「えだいち、あっち」

押野が言うほうを見ると、らせん階段らしきものの一部が見える。ぼくたちは、足早に向かった。そのときだ。

「おい！ なにしてる！」

びくつとした。向こうから、作業着を着たおじさんが走ってくる。

「おい、こんなところになにしてるんだ。なんの用だ！」

背の低い瘦（や）せている男の人だった。何歳くらいだか見当がつかない。

「……見学です」

押野が言った。

「そんなこと聞いたらん。④守衛のじいさんは知っているのか」

その人は、そう言つて親指を立ててうしろのほうを指差した。どうやら、ぼくたちが来たのと反対のほうに正門があつたらしい。

「フェンスのところから来ました」

押野はらせん階段が気になつてしょうがないふうだった。

「ここは立ち入り禁止だ。お前たち、どこの小学校だ？」

どこの小学校だ、と聞かれて、ぼくの鼓動は一気に速くなった。学校に通報されて椎野先生に知らされて、おじいさんにまで連絡がいったらどうしようと思った。今すぐ謝つて、早く出ていきたい気持ちになった。

「ここはなんの工場ですか？」

押野が聞いた。

「なんの工場かだつて？ そんなことも知らないで見学に来たつていうのか？」
そう言つて、うすら笑いをした。そいつはとても意地悪な大人だった。今まで見たことのないような意地の悪い大人だった。

④「なんの工場か教えてほしいんです。お願いします」

押野が頭を下げた。心臓はばくばくだったけど、ぼくも真似して頭を下げた。

「不法侵入だな。警察呼ぶか」

にやにや笑いながら、そいつが言った。⑤「ぼくは、もう本当に帰りたくなつてしまった。おろおろするぼくの横で、押野はまだ頭を下げたままだ。」

「向こう側を見せてください」

頭を上げると同時に押野がそう言つて、階段側へと走つて行つた。

「おい、待て」

作業着の男は、大きな声で言つて押野のあとを追つていった。ぼくはどうしていいかわからなくて、その場に突つ立つたままだった。足が動かなかった。どうしよう、どうしよう。

頭の中が真っ白になった。押野が無茶をして捕まつたのかもしれない。どうしよう、どうしよう、どうしよう。工場内はしんといて、ぼくはだだっ広い敷地に一人残されて呆然（ぼうぜん）としていた。足が接着剤で地面にくっついたみたいに、この場所から動けない。どんよりとした鉛色の空が今にも落ちてきそうで、押しつぶされそうだった。

押野の声が聞こえた気がした。少ししてから、押野と作業着の人が戻ってきた。

「放せよ」

男は、押野のTシャツの襟ぐりをつかんでいた。⑥「ぼくは本当に怖くなった。」

「放せて言つてんだよ」

押野が男を突き放した。男はあつけなく、押野から離れた。押野と同じくらいの身長だ。

「ほら、早く帰れ。そのフェンスからは出るなよ。向こうの正門から帰れ。わかつたな」

男はそう言つて、そのまま歩いてどこかに行つてしまった。途中で、二回も地面に唾を吐いた。

押野はよれたTシャツを直してから、帽子を取つてうるさそうに髪の毛をはらつた。

「だ、大丈夫？」

ようやくぼくは口に出した。今にも消え入りそうなぼくの声は、震えている気がした。

「うん、大丈夫」

押野はうなずいたけど、ちつとも大丈夫じゃなさそうな顔だった。ぼくらは、あの男に言われたとおりに、正門のほうへ歩いていった。押野はなんにもしゃべらなかつた。なにがあつたのか、なにを見たのか聞きたかつたけど、⑦「声をかけることができなかった。ぼくは、自分が情けなくて仕方なかつた。友達に協力したり、助けたりすることもできないなんて。」

正門まではかなりの距離があつたけど、いろんなことを考えていたら、あつという間だった。門のところに守衛室があつた。中には年配のおじさんがいた。

「ちょっと、君たち。どこから来たんだ」

案の定、声をかけられた。押野は守衛さんを一瞥（いちべつ）しただけで、口をひらく気配がなかつたから、ぼくが答えた。

「向こう側のフェンスから中に入りました。すみません」

守衛さんは、「ああ」と納得した様子で、「鍵が壊れてたんだつたなあ」とのんびりと言つた。

「作業着の人に怒られて、正門から出ると言われました」

「ああ」

守衛さんはまた納得したようにうなずいて、「あいつかあ」と小さく言つた。

「この工場は今、夏休み中なんだよ。まあ、何人かの職員は出ているがね。二人とも、気を付けて帰りなさいよ」

やさしい言い方でそう言ってくれた。ぼくは、すごくほっとした。さっきの怖さが⑨帳消しになるくらいほっとした。

「ここ、なんの工場なんですか」

押野が突然守衛さんに向かって、怒ったように聞いた。守衛さんは笑いながら、

「金属のリサイクルをする工場だよ。スクラップ工場と言えはわかるかな」と答えた。

押野は「⑧そうですか」と言って、帽子を脱いで頭を下げた。ぼくもそれにならって挨拶（あいさつ）して、工場をあとにした。

水平線からは、大きな黒い雨雲がもくもくと出ている。ひと雨きそうな感じだけど、海水浴客は帰る気配はなかった。カップルや家族連れが多い。波がかなり高い。監視員のいる台には黄色い⑩ハタがはためいている。注意警告だ。

ぼくらはテトラポッドに座って、おじいさんが作ってくれたおにぎりを食べた。塩がきいていておいしかった。押野も「うまい」と言ってくれた。けど、押野の元気がないの是一目瞭然だった。麦茶はぬるくなって、ピンボケした味になっていた。

「さっきはごめんね」

ぼくは謝った。押野が一人で悪者になったみたいだったから。

「えだいちが謝ることはない。俺のほうが悪かった。ごめんな」

押野は無理に笑顔を作るみたいな顔で言った。

「ぜんぜん、ロボットが作るおもちや工場じゃなかったよ」

ああ、そうだった。そんな大事なこと、ぼくの頭からはもうすっかり抜けてしまっていた。

「押野はらせん階段のところ、見てきたんでしょ？ どうだったの」

ぼくの質問に、押野は顔をゆがめた。

「ぜんぜん」

押野はおおげさに手を振った。

「ぜんぜん思ったのとちがって。でかいタンクみたいのがあったけど、すげーさびてて、よくあるガスタンクとか下水場のタンクみたいだった。きたねえ鉄塔が何本もあったけど、もう百年そのままそこに⑪ボウチされてるみたいだった」

冗談みたいに押野は言った。

「薄汚いだけの工場だったんだ。あの、頭のおかしいへんなオヤジが働いている、ただの汚い工場だったよ」

ぼくは実際に自分の目で確かめたわけじゃなかったから、それがどんな光景だったのかわからないけど、押野の説明でほとんど想像できた。ぼくは、ますます押野に申し訳ないような気持ちになってしまった。

あのとき勇気を出して、ぼくも一緒に見にいけばよかったと思った。あの男の人に首をつかまれたとしても、見にいけばよかったのだ。

「がつくりー、って感じだよ」

「うん」

「想像してたのとまったくちがったよ。ばかみたいだ」

⑫ばかみたいじゃない、と言いたかったけど、言えなかった。

「あーあーあー」

見にくなりやよかったな、自分だけに言うような小さい声で押野は言った。

最初の雨が、テトラポッドにしみをつけた。

問1 — ㉞㉟について、カタカナは漢字に直し、漢字には読み方を記しなさい。

問2 — ①「ぼくにはその声がよく聞こえた」について、その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 今は押野のことをとても頼りにしているから
- イ 押野がとても大きな声でさげんでくれたから
- ウ 自転車のスピードがゆるんで落ち着いたから
- エ 本場に工場があるのか押野を疑っていたから
- オ 予想もしないようなことを押野が言ったから

問3 — ※ — にあてはまる最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア おろおろ イ そわそわ ウ びくびく エ ぶらぶら オ わくわく

問4 — ③「つま先立ちになって」について、このときの「ぼくら」の気持ちに最も近いものを本文中のA～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問5 — ④「なんの工場か教えてほしいんです。お願いします」と押野が言ったときの「ぼく」の気持ちを説明しなさい。

問6 — ⑥「ぼくは本当に怖くなった」について、このときの気持ちを、——⑤「ぼくは、もう本当に帰りたくなってしまった」とのちがいが分かるように説明しなさい。

問7 — ⑦「声をかけることができなかった」について、その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 押野が自分のことを本当は怒っているかもしれないと思ったから
- イ 戻った押野の表情が、今まで見たことがないようなものだったから
- ウ ここで押野を怒らせてしまったら、一人で帰らなくてはならないから
- エ 声をかけると、おじさんに見つかってしまうのではと不安になったから
- オ 押野の姿から、さっきの怖さがよみがえってきて早く帰りたくなったから

問8 — ⑧「そうですか」について、このときの「押野」の気持ちを五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問9 — ⑨「ばかみたいじゃない」について、「ぼく」がこのように思った理由を説明しなさい。

問10 — ②「俺、ずっと気になってたんだ」とあるが、あなたがずっと「気になって」いることを具体的に教えて下さい。

(2011年度)

国語 解答用紙 その一

受験番号

氏 名

[illegible]

氏 名